

長期的方言接触による言語変化

—英語話者による文法的変化—

平野 圭子 (北九州市立大学)

1. はじめに

本発表はイギリスとアメリカから来日した英語話者の「所有を表す英語表現」(*have got, have, got*) (Kroch 1989; Tagliamonte 2003, 2013a, 2013b; Tagliamonte, D'Arcy & Jankowski 2010)を分析し、長期間の方言接触 (Britain 2018; Trudgill 1986, 2004)により言語変化がどのように進行するかを検証する実時間調査の中間報告である。日本在住の英語話者から異なる時期に収集した自然談話の言語データを利用し、例 a-c 下線部の「所有を表す英語表現」の使用実態を分析する。方言接触環境における初期段階のバリエーションと長期段階でのバリエーションを比較し進行中の変化を論証する。

- a. I've got an elder sister.
- b. I have an apartment.
- c. You got the west coast beaches for surfing.

本研究は次の3つの言語コーパスを用い、「所有を表す英語表現」を抽出する。(1) 日本到着直後のイギリス人とアメリカ人英語話者から収集した自然談話のコーパス【第1データ】、(2) 同じ話者から1年後に収集した自然談話のコーパス【第2データ】、そして(3) 日本に7年以上住んでいるイギリス人とアメリカ人から収集した自然談話のコーパス【第3データ】の3つである。イギリス、アメリカ出身の英語話者40人から収集した合計26時間におよぶ自然談話の言語データより、800個以上の「所有を表す英語表現」を抽出した。分析の結果、【第1データ】から【第2データ】への言語変化の方向と、【第2データ】から【第3データ】への言語変化の方向が一定ではないことが判明した。長期的な方言接触環境における言語変化の方向は必ずしも一方向に推移し続けるとは限らず、進行中の長期的な変化の過程で方向を変える可能性があることを本発表で提示する。

分析結果の考察には、方言接触によって新たな方言が形成される際にたどる言語的プロセスのひとつ平準化 (levelling) と長期的アコモデーションの理論からの解釈を試みる。平準化は方言混合において少数派の変異形や有標な変異形が消失する現象である (Britain 2018; Trudgill 1986)。長期的アコモデーションとは同一言語話者と接触する際に起こる一時的なアコモデーション (Coupland 1984; Giles & Powesland 1975)が長期的かつ定期的に繰り返し起こると、(話し方を近づける) コンバージェンスによって取り入れられる言語特徴が半永久的に維持される現象である (Trudgill 1986)。日本における英語方言接触により誘発された「所有を表す英語表現」の変化の過程をいずれかの理論で説明できるか検証する。

2. 日本在住の英語話者

本研究でいう日本在住の英語話者とは英語圏より来日した英語母語話者を指し、第二言語や外国語として英語を使用する外国人や日本人は含まれない。日本在住英語話者はJETプログラム (The Japan Exchange and Teaching Programme) や語学学校などの英語教師等の在留資格で1年から数年間日本に滞在する者から、大学での教育・研究やビジネスを目的とし数年から数十年間滞在する者までさまざまである。2019-2020年のJETプログラム参加者は世界57ヶ国から約5700人にのぼる (CLAIR 2021)。2019年12月時点の在留外国人は3百万人弱でそのうち主な英語圏出身者数だけでも15万人を超える (e-Stat 2021)¹。日本在住の英語話者らは来日直後から自分の出身地以外の様々な英語方言話者や日本人を含む非英語母語話者らと多種多様な社会的交流を持ちながらコミュニケーション活動を行い、長期間にわたって日常的に方言接触や言語接触を繰り返す。

¹ ここで言う「主な英語圏出身者数」とは第一言語または公用語が英語で、2019年12月時点で1000人以上の在留者がいる国々の人数を合計したものである。合計に含まれる国は在留者数が多い順に米国、インド、英国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、ナイジェリア、シンガポール、ガーナ、アイルランド、南アフリカ共和国である。

3. 所有を表す英語表現

本発表は肯定文に表れる「所有を表す英語表現」‘have got’, ‘have’, ‘got’を分析対象とする。イギリス英語における所有を表す‘have’の使用は10世紀までさかのぼる。16世紀には‘got’が付け加えられ、その後‘have got’の形をとるようになった。のちに‘got’単独でも用いられるようになった。イギリス英語では‘have got’はインフォーマル、‘got’はさらにインフォーマルなものともみなされる。‘Have got’はイギリス英語に特徴的な表現で、‘have’よりも‘have got’の方がより頻繁に用いられる。‘Got’の使用頻度は低い。イギリスでは年齢が低い話者の方が高い話者より‘have got’の使用頻度が高い傾向にある。一方‘have’や‘got’は北アメリカ英語に特徴的な表現である。北アメリカ英語では‘have’が最も頻繁に用いられ、‘got’も比較的によく用いられる。北アメリカでは話者の年齢が低くなるにつれ‘have’の使用頻度が高くなる傾向にある (Jankowski 2016; Kroch 1989; Tagliamonte, 2003, 2013a, 2013b; Tagliamonte, D’Arcy and Jankowski 2010)。

4. 方法論

4.1 言語データ

本研究は次の3時点で収集した自然談話の言語データを用い、「所有を表す英語表現」を抽出した。(1) 日本に到着直後のイギリス人とアメリカ人の話者から2000年に収集した自然談話のコーパス【第1データ】、(2) 日本で英語を教えながら1年間滞在した後に【第1データ】と同じ話者から2001年に収集した自然談話のコーパス【第2データ】、そして(3) 日本に7年以上住んでいるイギリス人とアメリカ人から現在収集中の自然談話のコーパス【第3データ】の3種類である。【第1データ】と【第2データ】の被験者は同一話者であるが、【第3データ】の被験者は【第1・2データ】の被験者とは異なり、別の話者から収集したものである。なお【第3データ】の収集は現在も進行中のため、本発表では現時点で収集済みのデータを使用し、分析の経過報告を行う。

【第1データ】と【第2データ】は福岡県、佐賀県、熊本県在住の英語母語話者から2000年と2001年の二度にわたってそれぞれ45分間の自然談話を収録した。【第3データ】は福岡市、北九州市を中心とした福岡県在住者からそれぞれ30分間の自然談話を収録した。いずれの自然談話収録にも調査者は同席せず、くつろいだ雰囲気の中で同じ出身国話者とのペアで会話が行われた。合計26時間、約37万語分の会話データを本発表のために用いた。

4.2 被験者

本調査の被験者数を表1に示す。【第1データ】収集時の被験者²は2000年来日した英語母語話者36人(イギリス人18人、アメリカ人18人)だったが、そのうち【第2データ】収集時に参加した者のデータのみを今回使用した。【第2データ】参加者はイギリス人15人(男5/女10)、アメリカ人11人(男7/女4)の計26人で、JETプログラム参加の外国語指導助手24人、語学学校の英会話講師2人で構成される。本発表で使用する【第1・2データ】被験者の【第1データ】収集時年齢は21歳から32歳で、平均年齢は23歳である。全員ほぼ同レベルの学歴(大学卒以上)を持つ。【第3データ】の被験者は日本に11年以上在住しているイギリス人6人(男6/女0)、7年以上在住しているアメリカ人8人(男6/女2)の計14人で、イギリス人IT技術者ひとりを除き、全員大学教員である。【第3データ】収集時の被験者の年齢は36歳から57歳で、平均年齢は49歳である。日本滞在開始時の年齢は19歳から32歳で、平均年齢は27歳である。日本在留期間は7年から37年で平均在留期間は21年である。大学教員の研究分野は言語学や文学から芸術や歴史、法律にまで及び、必ずしも英語教育を専門としているわけではない。

表1: 被験者数

出身国	第1データ	第2データ	第3データ
イギリス	15	15	6
アメリカ	11	11	8
計	26	26	14

4.3 「所有を表す英語表現」の出現回数

【第1データ】から324個、【第2データ】から343個、【第3データ】から153個、計820個の「所有を表す英語表現」の使用例を抽出した(表2)。否定文と疑問文で用いられたものは除外し、肯定文で用いられた使用例のみ分析対象とする。

表2: 「所有を表す英語表現」の国別・データ別出現回数

出身国	第1データ	第2データ	第3データ	計
イギリス	217	219	45	481
アメリカ	107	124	108	339
計	324	343	153	820

² 被験者や言語データに関する詳しい情報はHirano (2013)を参照されたい。

5. 結果

「所有を表す英語表現」の *have got*, *have*, *got* が【第1データ】³, 【第2データ】, 【第3データ】でそれぞれどの程度使用されているかイギリス人, アメリカ人被験者に分けて分析結果を提示する。

5.1 イギリス人による「所有を表す英語表現」のバリエーション分布と変化

イギリス人話者による「所有を表す英語表現」のバリエーション分布を表3に示す。イギリス人の来日時【第1データ】の分析では *have got* が最も頻繁に使用される形式 (55%) で, *have* がそれに続き (42%), *got* の使用率はわずか (3%) であることが示された。来日1年後の【第2データ】の分析結果によると, 来日時より1年後に *have got* の使用率を増加させ (55% → 62%), 逆に *have* の使用率を減少させている (42% → 35%)。 「所有を表す英語表現」の選択に見られるこの変化は, イギリス人がイギリス英語的な特徴を1年後により強く表すようになったことを示している。ところが日本に長期在住のイギリス人による【第3データ】の分析では, 言語変化の方向が逆転していることが示された。【第2データ】の数字と比較すると, イギリス人話者の *have got* の使用率は【第3データ】の方が低く (62% → 49%), *have* の使用率は高くなっている (35% → 49%)。図1が示すように, *have got* の使用率は来日時の【第1データ】よりも下がり (55% → 62% → 49%), *have* の使用率は【第1データ】よりも高くなっている (42% → 35% → 49%)。すなわちイギリス英語的な特徴を示す表現 *have got* の使用率は来日直後から1年後に一時的に上がったものの, 長期滞在中に減少に転じている。一方アメリカ英語的な特徴をもつ *have* の使用率は1年後に一時的に減少したものの, その後増加に転じたということだ。

5.2 アメリカ人による「所有を表す英語表現」バリエーション分布と変化

アメリカ人話者による「所有を表す英語表現」のバリエーション分布を表4に示す。アメリカ人による【第1データ】の分析では *have* が最も頻繁に使用される形式 (74%) で, *have got* と *got* の使用率は低いことが示された。1年後の【第2データ】の分析によると, アメリカ英語色の強い *got* の使用率を到着時よりも減少させたが (14% → 4%), その分 *have* の使用を増加させている (74% → 84%)。一方 *Have got* の使用率に変化はなかった (12% → 12%)。アメリカ人はイギリス英語的な特徴を示す *have got* を増加させることも減少させることもなく, アメリカ英語的な特徴である *have* と *got* の合計使用率を維持していた。しかし【第3データ】の分析結果を【第2データ】の数字と比較すると, *have* の使用率を減少させ (84% → 73%), かわりに *have got* の使用率を増加させている (12% → 19%)。すなわち, 図2が示すように, イギリス英語的な特徴のある *have got* の使用率は来日直後から1年後にかけて変化がなかったにもかかわらず, 長期滞在中に増加に転じている (12% → 12% → 19%)。またアメリカ英語的な特徴を示す *have* と *got* の合計使用率も1年後までは変化がなかったが, その後減少に転じている (88% → 88% → 81%)。

表3: イギリス人「所有を表す英語表現」バリエーション分布

データ	第1データ		第2データ		第3データ	
	n	%	n	%	n	%
<i>Have got</i>	119	55%	136	62%	22	49%
<i>Have</i>	91	42%	76	35%	22	49%
<i>Got</i>	7	3%	7	3%	1	2%

表4: アメリカ人「所有を表す英語表現」バリエーション分布

データ	第1データ		第2データ		第3データ	
	n	%	n	%	n	%
<i>Have got</i>	13	12%	15	12%	20	19%
<i>Have</i>	79	74%	104	84%	79	73%
<i>Got</i>	15	14%	5	4%	9	8%

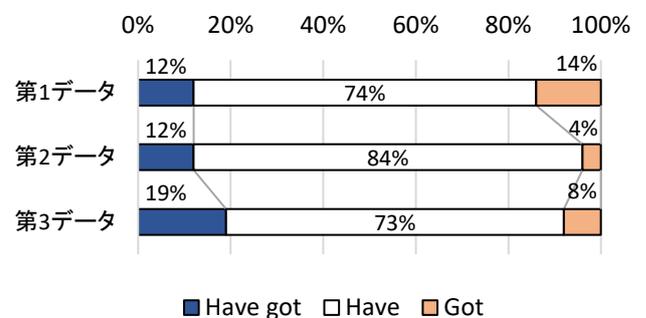
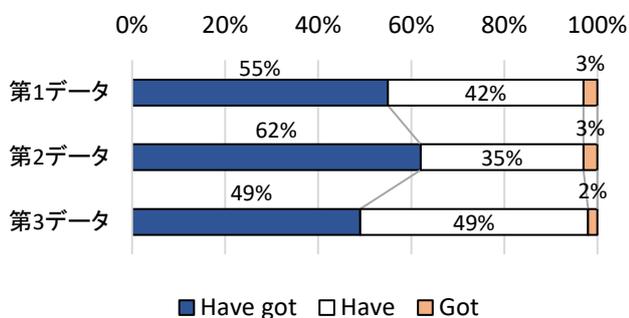


図1: イギリス人「所有を表す英語表現」バリエーション変化

図2: アメリカ人「所有を表す英語表現」バリエーション変化

³ 【第1データ】と【第2データ】の分析結果はHirano & Britain (2020)によるものである。

6. 考察と結論

本発表は異なる時期に収集した3つの言語コーパスを利用した分析により、長期的な方言接触環境において起こり得る言語変化はその進行方向が常に一定ではなく別の方向に転じる可能性のあることを提示した。方言接触下で新たな方言が形成される際に起こる言語的プロセスのひとつ平準化 (Britain 2018; Trudgill 1986)は、方言混合において有標または少数派の変異形が消失し、無標で多数派の変異形が生き残るという現象である。英語圏出身の日本在留外国人の中で最も数が多いのはアメリカ人である (e-Stat 2021)。国別の日本在留外国人数の比率から判断すると、日本国内で最も多く使用される「所有を表す英語表現」は *have* だと考えられるが、アメリカ英語色が濃い *have* が「独り勝ち」という結果は本調査では見られなかった。したがって、日本で観察される「所有を表す英語表現」において現在平準化が起こっているという事実は観察されなかった。来日1年後イギリス人話者は「所有を表す英語表現」でよりイギリス英語的特徴を強く出すようになり、アメリカ人話者はアメリカ英語的な特徴を来日当時と同じレベルで維持していた。しかしその後異なる方向に変化が進み、イギリス人はイギリス英語的特徴の強い表現の使用を減少させ、アメリカ人はイギリス英語的な特徴の強い表現を取り入れるようになった。この現象は「長期的アコモデーション」(Trudgill 1986)の結果現れたものと考えられる。同一言語話者と接触すると一時的なアコモデーションが起こることがあり (Coupland 1984; Giles & Powesland 1975)、同様の接触が長期にわたって定期的に繰り返されると、コンバージェンスによって取り入れられる言語特徴が半永久的に維持される可能性がある。日本在住の英語母語話者に見られる言語変化はイギリス人とアメリカ人がお互いの言語特徴を取り入れた「長期的アコモデーション」(Trudgill 1986)の産物である可能性が高い。長期間にわたる方言接触によってもたらされる言語のバリエーションと変化の過程をさらにひも解くため、方言接触の変化の経緯を今後も注視していきたい。

参考文献

- Britain, D. (2018). Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg, J. Nerbonne and D. Watt (eds), *Handbook of Dialectology*. Oxford: Wiley Blackwell. 143–158.
- CLAIR (一般財団法人自治体国際化協会). (2021). JET プログラム参加者数 (2019-2020). <<http://jetprogramme.org/ja/countries/>> (2021.12.31 閲覧).
- Coupland, N. (1984). Accommodation at work: Some phonological data and their implications. *International Journal of the Sociology of Language* 46: 49–70.
- e-Stat 政府統計の総合窓口.(2021). 在留外国人統計「都道府県別 国籍・地域別 在留資格別 在留外国人」(2019年12月調査). <<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003416093>> (2021.12.31 閲覧).
- Giles, H., and Powesland, P. F. (1975). *Speech style and social evaluation*. London: Academic Press.
- Hirano, K. (2013) *Dialect contact and social networks: Language change in an Anglophone community in Japan*. Frankfurt: Peter Lang.
- Hirano, K. and Britain, D. (2020). Accommodation and social network: Grammatical variation in a community of expatriate English speakers in Japan. In Y. Asahi (ed.), *Proceedings of Methods XVI: Papers from the sixteenth international conference on methods in dialectology, 2017*. Berlin: Peter Lang. 91–104.
- Jankowski, Bridget, L. (2016). “We’ve got our own little ways of doing things here”: Cross-variety variation, change and divergence in the English stative possessive. *University of Toronto Linguistics PhD students’ Generals Papers*, University of Toronto. Retrieved on 5 November 2017, from <http://twpl.library.utoronto.ca/index.php/twpl/article/view/19589/19646>.
- Kroch, A. S. (1989). Reflexes of grammar in patterns of language change. *Language Variation and Change* 1: 199–244.
- Tagliamonte, S. A. (2003). Every place has a different toll’: Determinants of grammatical variation in cross-variety perspective. In G. Rohdenburg and B. Mondorf (eds.), *Determinants of grammatical variation in English*. Berlin: Mouton de Gruyter. 531–554.
- Tagliamonte, S. A. (2013a). *Roots of English: Exploring the history of dialects*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tagliamonte, S. A. (2013b). The verb phrase in contemporary Canadian English. In B. Aarts, J. Close, G. Leech and S. Wallis (eds.), *The verb phrase in English: Investigating recent language change with corpora*. Cambridge: Cambridge University Press. 133–154.
- Tagliamonte, S. A., D’Arey, A., and Jankowski, B. (2010). Social work and linguistic systems: Marking possession in Canadian English. *Language Variation and Change* 22: 149–173.
- Trudgill, P. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Basil Blackwell.
- Trudgill, P. (2004). *New-dialect formation: The inevitability of colonial Englishes*. Oxford: Oxford University Press.